

書と詩7 一書(画、舞踊など)・歌謡・詩・言葉・音・こころー

先回につづけて、良寛の周辺から見ていこう。

有願^{うがん} 元文3年(1738)〜文化5年(1808)

禅僧 能書家 良寛と深く親交した。良寛より20歳ほど上。

新潟県南蒲原郡大島村字代官島新田(現三条市代官島)の庄屋、

田澤孫右衛門の長男として生まれた。出家し、青年時代は諸国を行脚した。

40代初め頃、帰国し、燕市の萬能寺(曹洞宗)の住職などをした。

57歳のとき、白根市新飯田の円通庵(別称、田面庵^{たのもえ})の住職となった。

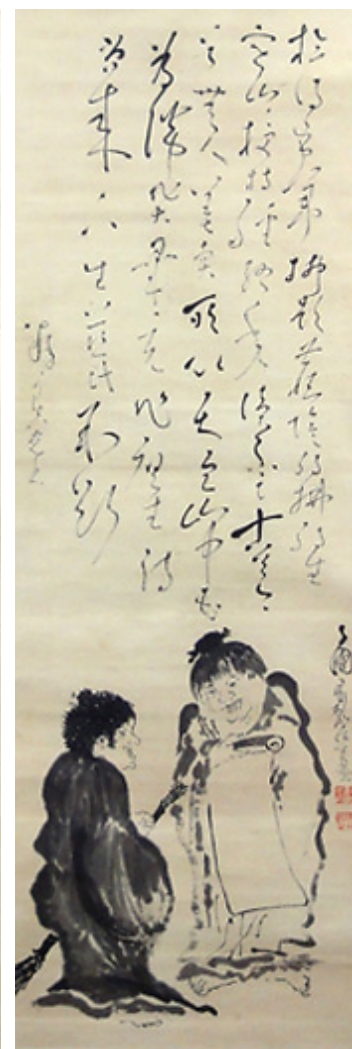
59歳以降良寛と交わる。円通庵の中に墓がある。



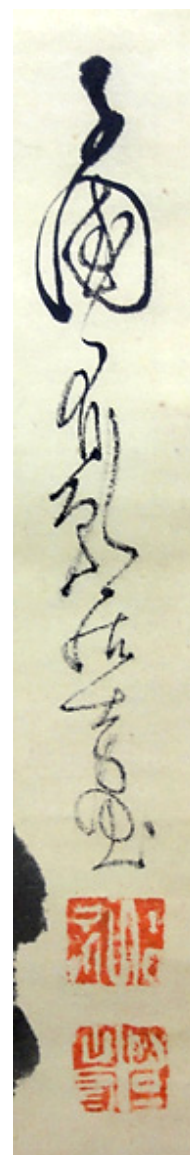
田面庵(円通庵)



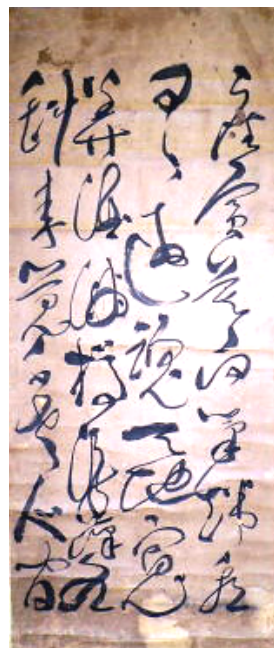
有願と良寛の像(田面庵)



有願画「寒山拾得図」 良寛賛
紙本水墨 41.7×123.2 cm 個人蔵



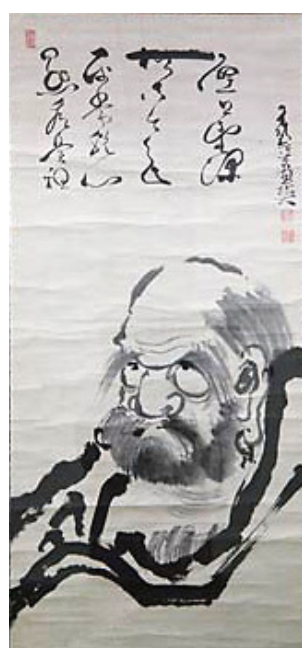
署名部分
于図有願居士画



有願書

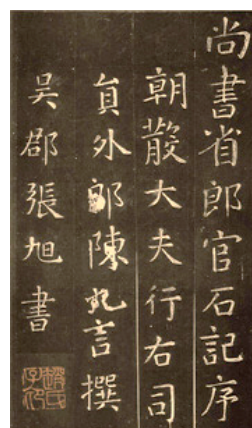


有願書画「福祿寿図自画賛」

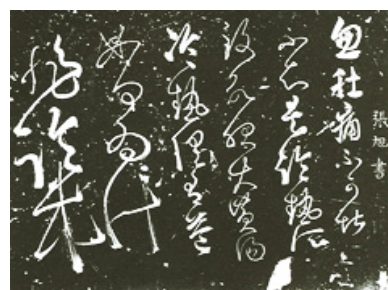


有願書画「達磨図自画賛」

有願は、良寛と同じく、張旭の「朗官石記」を楷書の手本とした。草書は、張旭の「肚痛帖」を手本とした。懷素の狂草体も学んでいる。良寛は有願の書道観の影響をうけたと思われる。絵は、46歳の時、狩野派の玉元に教わった。詩は、300以上残っている。「九相」を詩に詠んだのは、有願のほか、蘇軾と空海だけといわれている。



張旭「朗官石記」部分
唐代・741年

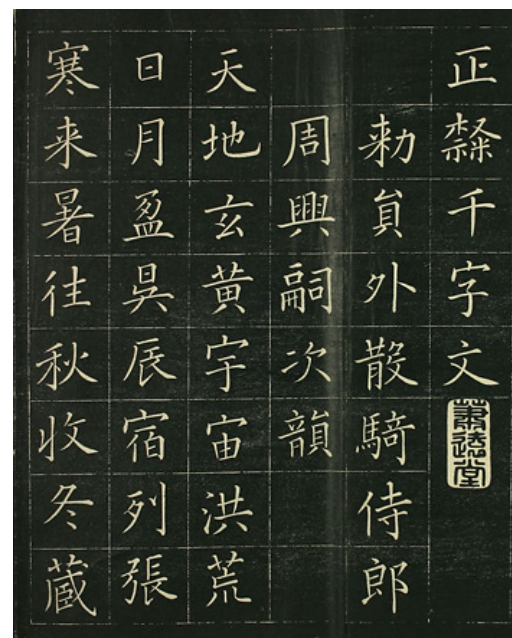


伝、張旭「肚痛帖」西安碑林蔵
北宋代(1058年)の摹刻。」6行30字

「にわかに腹が痛くて堪えきれず、冷熱が原因であるあかどうか、わからない。……」

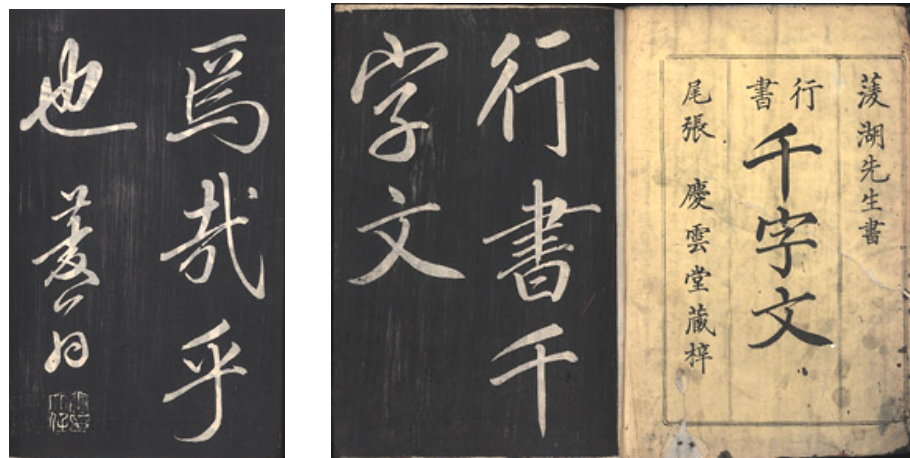
巻菱湖 安永6年（1777）〜天保14年（1843） 儒者・書家 「幕末の三筆」「江戸の三筆」の一人。

越後の巻（現新潟市）の出身。名は大任、字は致遠または起巖、号は菱湖、別号は弘斎、通称は右内。茶間屋をしていた館徳信の子だが、私生児。母の名も生年月日も不明。10歳のとき父が死ぬ。母は、彼を連れて池田某と結婚。養父もすぐ亡くなる。15歳のとき母が自殺。その後19歳で江戸に出て亀田鵬斎に師事し、儒学と漢詩と書を学んだ『巻菱湖伝』春名好重著、北井企画、2001年より）。役人になろうと考えていたが、「寛政異学の禁」で仕官をあきらめ、版下を書きながら書家として生きようと決意。29歳の時、書塾「肅遠堂」を開設。『十体源流』を著した。不運な人だが、下町で人気の書家となり、門弟は一万人を超えたという。菱湖流は幕末から明治にかけて一世を風靡した。明治政府と宮内庁の官用文字・欽定文字は、御家流から菱湖流に改められた。米庵・貫名松翁と共に「幕末の三筆」と称されている。また、亀田鵬斎、館柳湾と「江戸の三筆」とも並び称される唐様の大成者である。

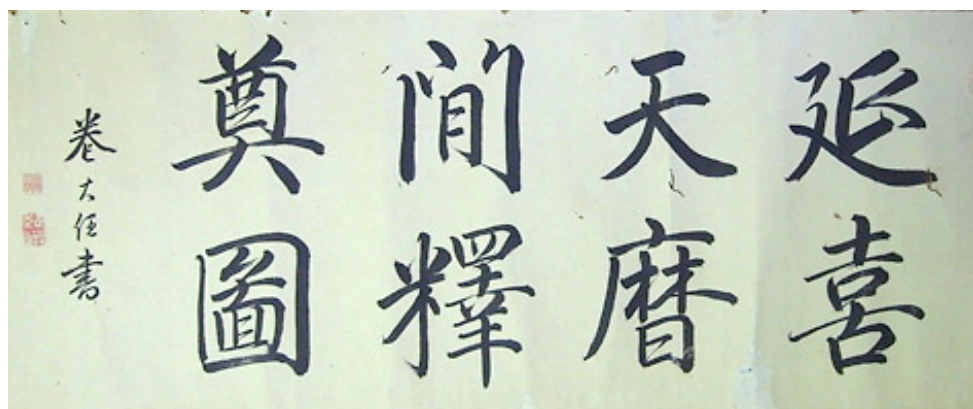


巻菱湖書「正隷千字文」部分 早稲田大学蔵

彼は、書を亀田鵬斎に学んだ後、趙孟頫や董其昌とともに、晋唐の書を学び、菱湖流を完成した。楷書は欧陽詢・褚遂良を、行書は李邕・王羲之を、草書は賀知章の『孝経』や孫過庭の『書譜』、王羲之の『十七帖』、李懷琳の『絶交状』などを、隷書は『曹全碑』を規範としたという。特に文化10年（1827）51歳のとき京都で近衛家秘蔵の『孝経』を見、唐人の用筆の妙を知ったといわれる。彼は青蓮院に出入りし、そこで三筆や三蹟や最澄の書などに触れ、書に開眼したともいわれる。

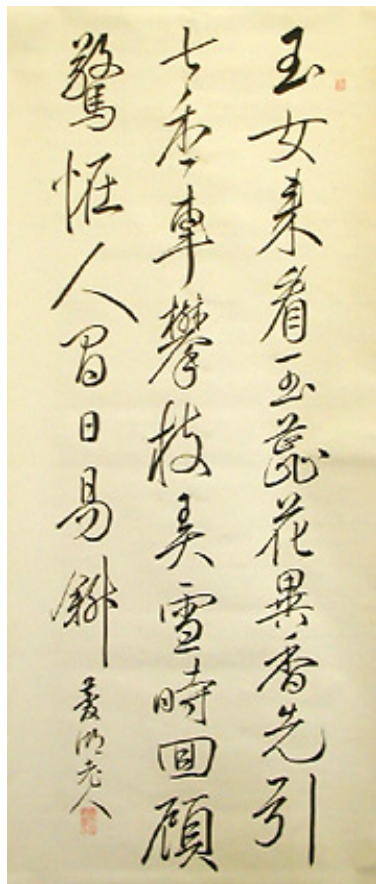


巻菱湖書「行書千字文」部分



巻菱湖書「延喜天曆間釋奠図」の題字 新潟県見附市釈迦塚町蔵 浅野家文書より

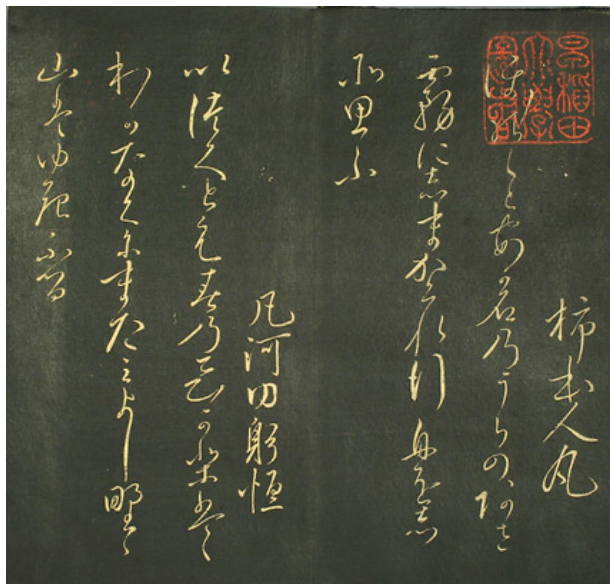
「延喜天曆」は平安時代中頃の年号。延喜は901～922年、天曆は947～956年。「延喜天曆間」は延喜天曆年間のこと。ここでは900年から957年の間のことで、その間に行われた釈奠という意味らしい。釋奠とは、孔子や儒教の先哲を先聖として祀る儀式のこと。儒祭、孔子祭ともいう。「釋奠」は釈奠。せきてん、しゃくてん、さくてんなどと読む。中国から伝来した。



巻菱湖書「七絶」春日井市道風記念館蔵

玉女來看玉蕊花
異香先引七香車
攀枝弄雪時回顧
驚怪人間日易斜

女来たりて看る玉蕊の花
異香先ず引く七香車 枝に
攀りて雪を弄び時に回
顧すれば 驚き怪しむ人間
の日に斜き易さを



巻菱湖書「三十六人一首」部分 24×13cm 早稲田大学蔵

柿本人丸
「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」
凡河内躬恒
「いづくとも春のひかりはわからなくにまだみ吉野の山は雪ふる」

明治5年8月の「学制」公布以降の習字教科書の執筆者に、門弟の巻菱潭（菱湖の養子）が選ばれ、菱湖流は、その後10年ほど続いたが、明治13年の楊守敬の来日以後北魏派の書風が始まり、唐様の新派に代わって、明治末まで北魏書道（六朝書道）が書道の主流となり、菱湖流は忘れ去られていった。



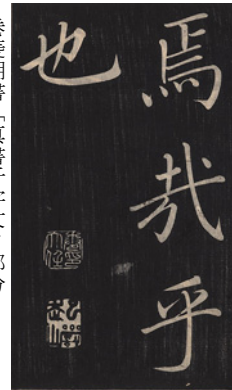
巻菱湖書「古今和歌集」かな序部分

菱湖の一番弟子は、中沢雪城、その門人に巖谷一六・西川春洞・金井金洞らがいる。
明治政府になって、巖谷一六や日下部鳴鶴など唐様の書家が太政官の文書課に採用された結果、公用の文書が御家流（和様）ではなく唐様で書かれるようになり、御家流に代わり菱湖流が公用書体に選ばれ御家流は廃れていった。御家流（和様）の能書は、近衛家熙ぐらしいしかないといわれる。
菱湖流は、欧陽詢の書法を取り入れた書風である。明治政府は、菱湖流に調和する仮名として、千陰流を選定した。

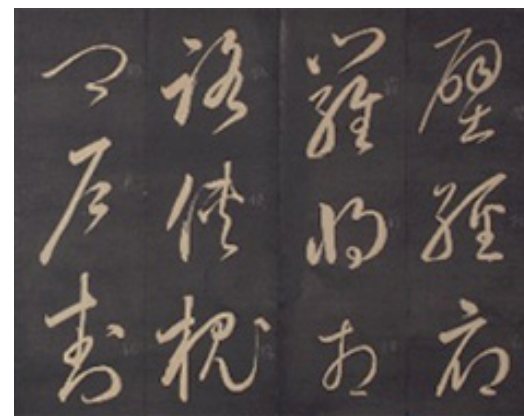


銘駒 菱湖体

将棋の駒の銘の代表的な書体になっている。



巻菱湖書「真書千字文」部分



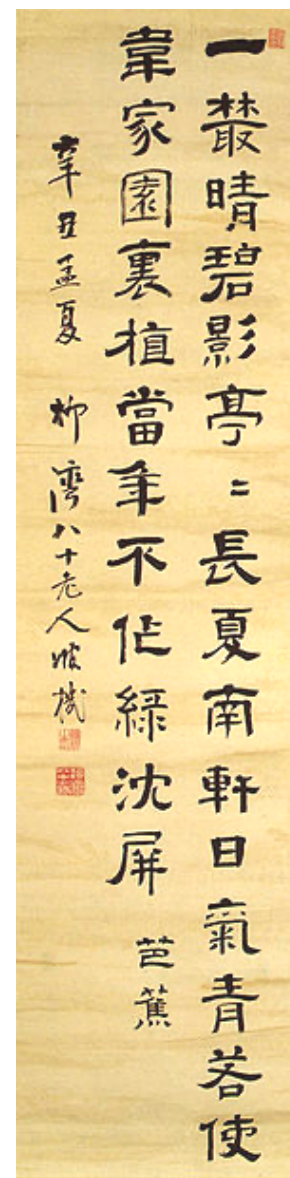
巻菱湖書「草書千字文」部分

78

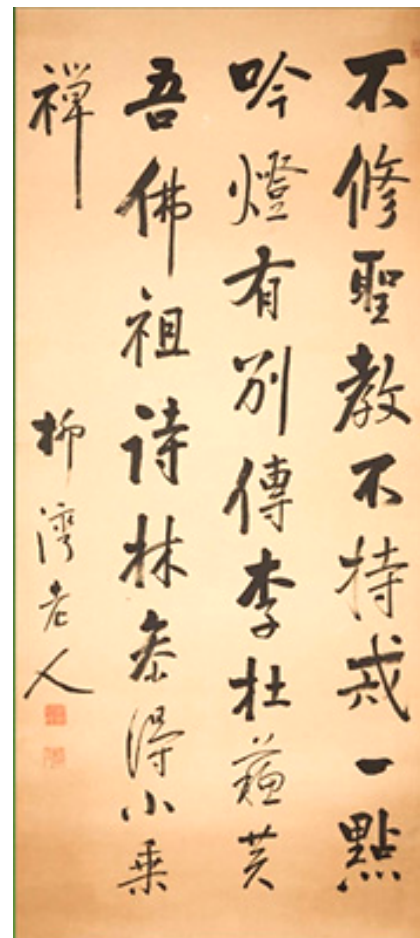
館柳湾 宝暦12年(1762)〜天保15年(1844) 漢詩人、書家(「江戸の三筆」の一人)

本姓は小山、名は機、字は枢卿、通称は雄次郎、号は柳湾など。和歌や篆刻も能くした。

新潟の廻船問屋の次男に生まれたが、早くに両親を亡くし、巻村の館徳信の養子となる。13歳で江戸に出て亀田鵬斎の弟子になった。役人として暮らしたが、66歳ごろ役人を引退し、以後、江戸の人気詩人となったらしい。温厚な大飯食らい。巻菱湖のはとこ(再従兄弟)、『柳湾漁唱』『林園月令』などの詩集がある。



館柳湾書「七絶隸書軸『芭蕉』」



館柳湾書「七絶」軸 楷書、行書

館柳湾の詩風は温雅といわれる。書風も温雅である。永井荷風が彼の詩を好んだことが知られている。

「清濁温雅の風に至りては他人の追隨を許さざるものあり」(荷風)

加藤千蔭 享保20年(1735)〜文化5年(1808) 国学者、歌人、和様書家。

江戸八丁堀の生まれ。姓は橘、名は千蔭、字は常世麿、号は芳宜園など。

54歳で役人をやめ、以後、学芸に専念した。寛政12年(1800)、

『万葉集略解』を完成した。良寛も、この本で万葉集を学んだという。

10歳頃より26年間、賀茂真淵に師事した。歌人としては「江戸派」。

歌風は古今調を基礎に、万葉や新古今からも影響をうけている。

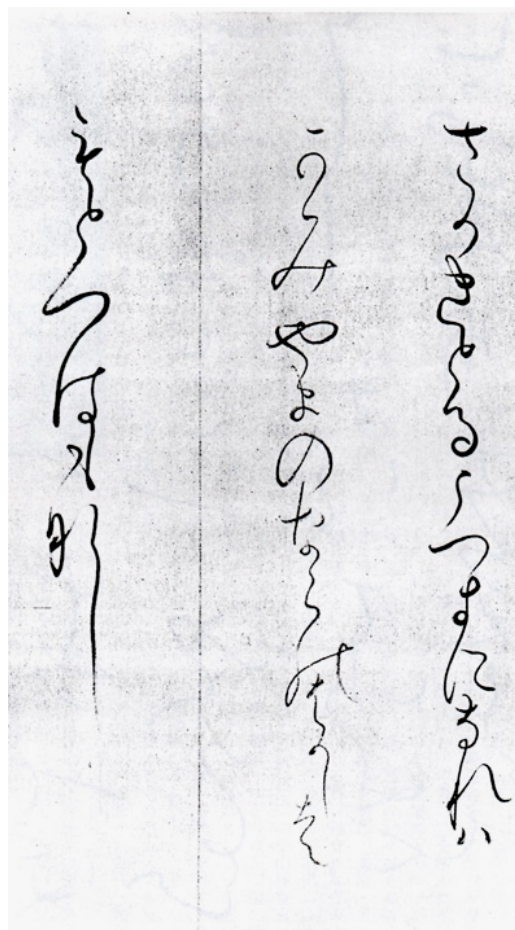
絵も上手く、写楽の正体は千蔭ではないか、という説もある。

書は、松花堂流や上代様を土台にして、「千蔭流」と呼ばれる独自の書風を創った。特に仮名書に優れている。明治政府は、公用書体として、巻菱湖の漢字に調和する仮名だと考え、千蔭流の仮名を選定した。



千蔭肖像 文化4年(1807)

橘千蔭で知られている。



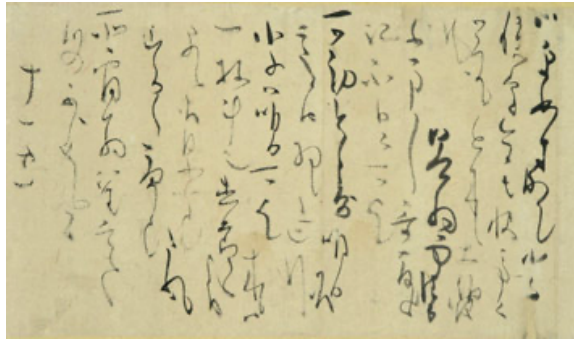
加藤千蔭書「新撰朗詠集」部分

柿とる卯月になれば
ば神山のならの葉が
しはもとつ葉もなし
(曾称好忠
そののとまだ)

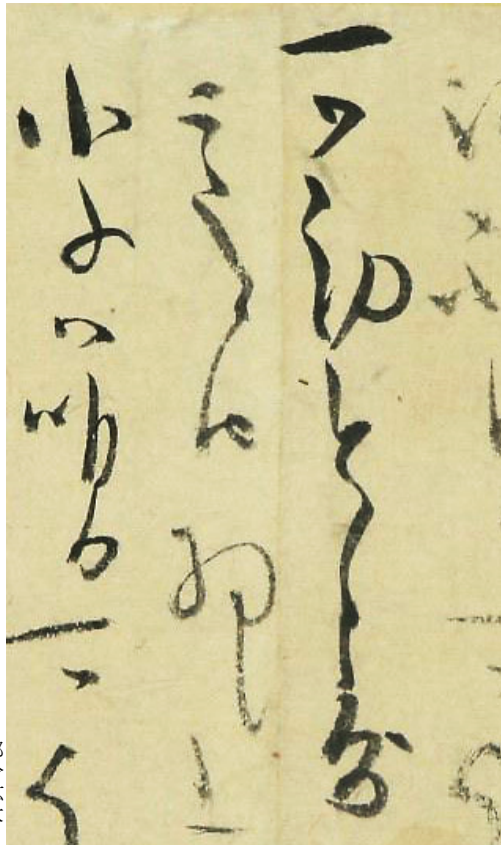
※卯月は陰暦四月。

神山は、上賀茂神社
の背後の山。葉がし
はは、葉柏。

もとつ葉は、古葉。
若葉に対していう。

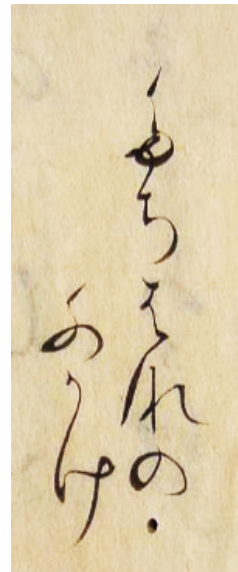


千蔭書「常蔭宛書簡」部分 16×36 cm 早稲田大学蔵

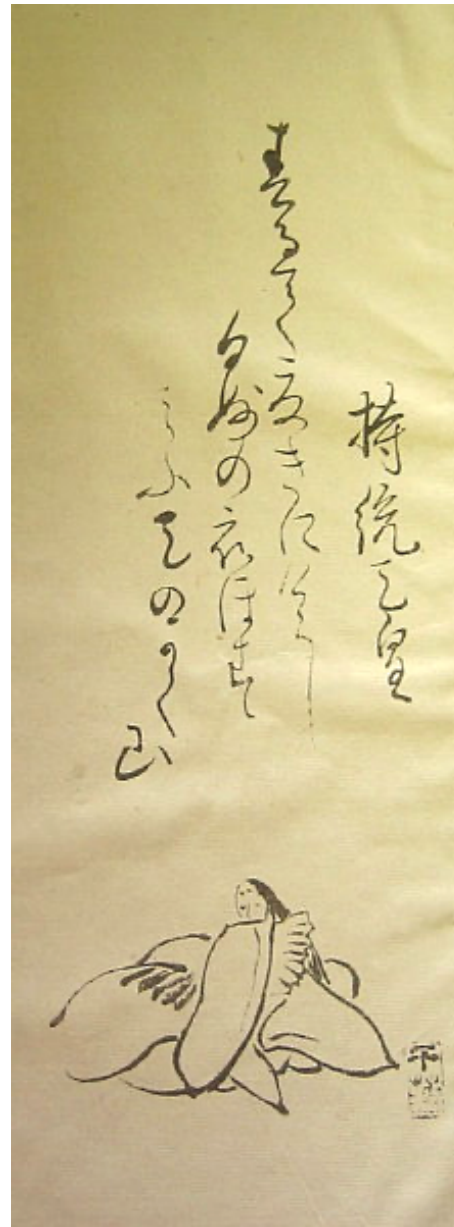


部分拡大

持統天皇
春過ぎて夏来にけらし
白妙の衣ほす
てふ天のかぐ山

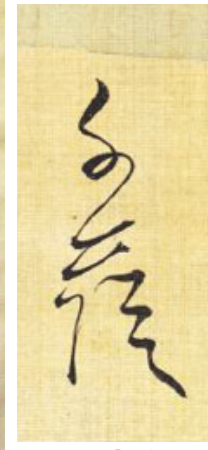


署名「たちばなのちかげ」

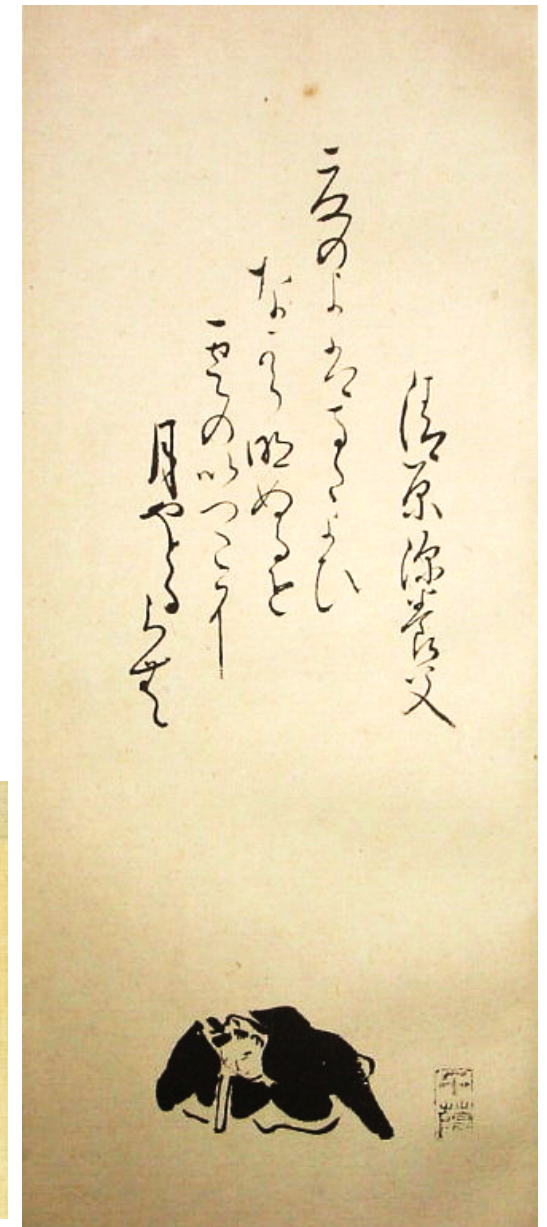


橘千蔭自画賛「千蔭百人一首」より

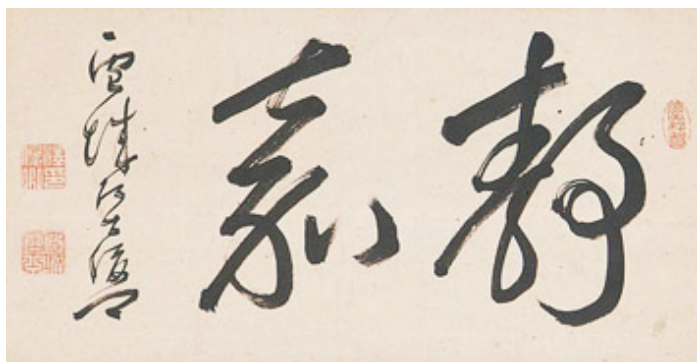
清原深養父
夏の夜はまだ宵
ながらあけぬるを
雲のいづこに
月やどるらむ



署名「千蔭」

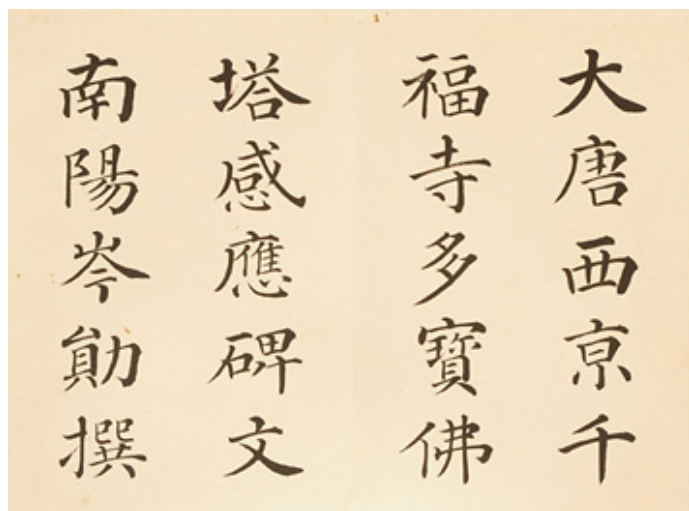


橘千蔭自画賛「千蔭百人一首」より



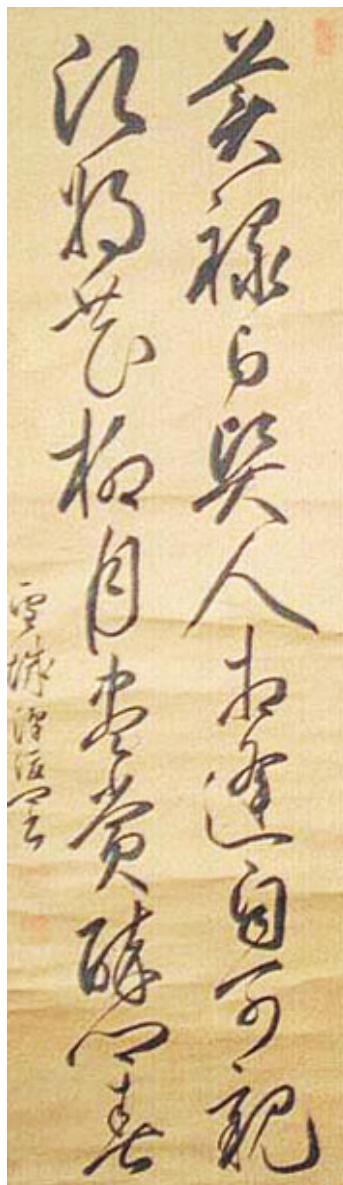
中沢雪城書「静嘉」扁額 28.9×56 cm 長岡市立中央図書館蔵

落款は雪城居士俊卿 静嘉は「清らかで美しい」という意

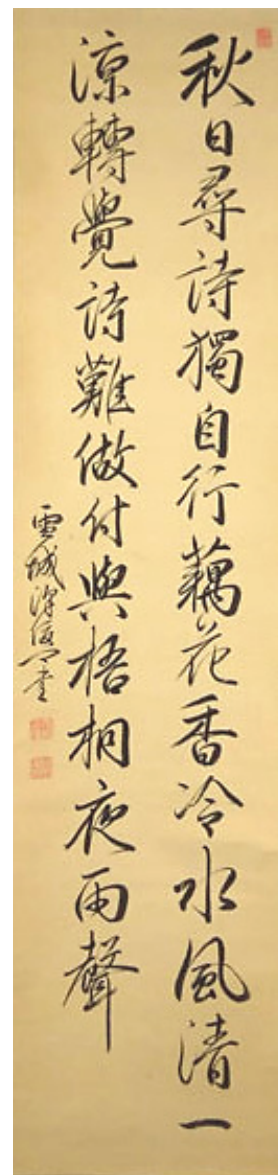


中沢雪城臨「臨書帖 多宝塔碑」1849年 29.8×17.4 cm 観峯館蔵
「多宝塔碑」は顔真卿44歳の楷書。

師の巻菱湖は欧陽詢を規範としていたが、40歳代になってから顔真卿を学んだという。師の追慕のための臨書らしい。



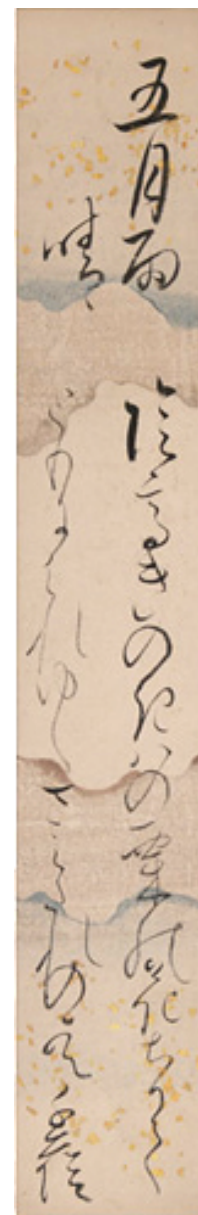
中沢雪城書「草書五言絶句」
紙本・98×30 cm 個人蔵



中沢雪城書「行書七言絶句」
紙本・半切 個人蔵

号は肅間堂。はじめは市川米庵に師事したが、1836年、巻菱湖の弟子となる。三重県津藩の藤堂侯に仕え、江戸に住んだ。門下に巖谷一六・西川春洞・金井金洞らがいる。

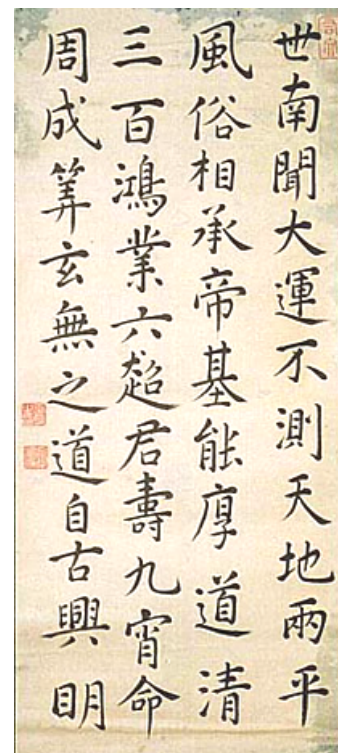
なかざわちじょう
中沢雪城 文化5年(1808)〜慶応2年(1866) 書家 巻菱湖の高弟
今の新潟県長岡市の武士の二男として生まれた。名は俊卿、字は子国、通称は行蔵、号は雪城・雪生など、堂



千蔭書「短冊」

五月雨晴 陰高きのきはの栗の花ちりて ともにはれゆくさみたれの雲 千蔭

さわだちこう
沢田東江 享保17年（1732）〜寛政8年（1796） 儒者 書家 作家 「東江流」を開いた。

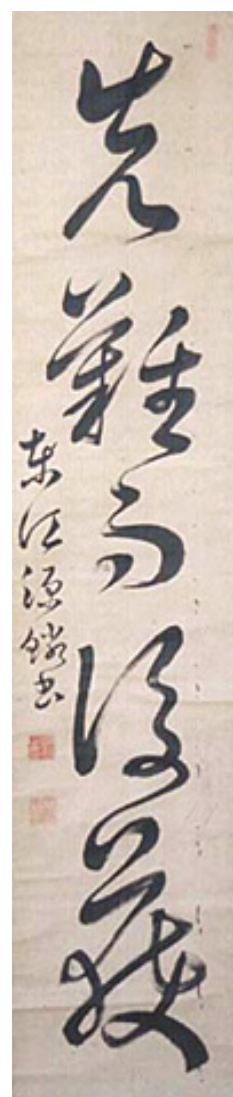


沢田東江書「楷書軸」紙本 68.3×29.5 cm
明和元年作、東江 34 歳の作品。

江戸の両国柳橋に生まれた。名は麟、字は文竜。書は高願斎に師事し、文徴明を学んだが、高願斎の死後、古法書を主張、明風の書を否定、魏晋の書体にかかのぼり、二王（王羲之・王献之）を規範にした。のちの二王聖典視へとつながる。著書に37歳のときに刊行された『東江先生書話』などがある。

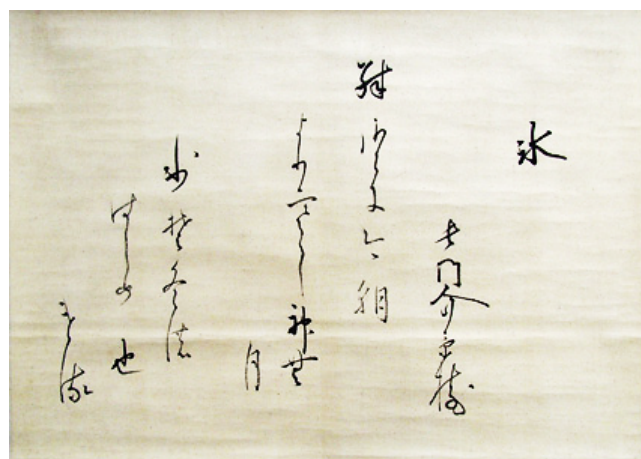


沢田東江書「行書五字」
孔子の言葉？



沢田東江書「草書五字」紙本 130×28.5 cm
『論語・雍也第 6』より。（仁者は）先ず難ん（なや）で後に獲る、・・・

かがわかげき
香川景樹 明和5年（1768）〜天保14年（1843） 歌人 「桂園派」の祖

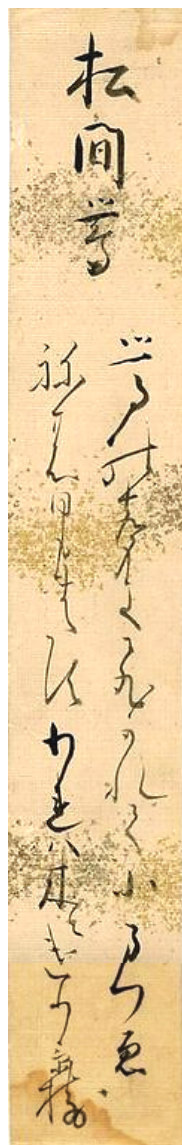


香川景樹書「氷」 42.2×30.3 cm 個人蔵

氷 長門介景樹
殊さらに今朝
より寒し神無
月
氷そ冬の
はじめ也
ける

鳥取県生まれ。鳥取藩藩士荒井小三次の子、名は景樹、号は桂園、梅月堂、万水楼など。
7歳のとき、父が病没し、一家離散。奥村有定の養子となる。26歳のとき上洛。その後、香川景樹の養子となり、京都歌壇を一世風靡したという。門人は千人余人。

公家の歌会にも出席し、本居宣長とも出会う。小沢蘆庵（ろあん）と出会い、私淑し、深い影響を受けた。伝統派の香川景樹と歌についての考えが合わなくなり、文化元年（1808）香川家と離縁。しかし、名はそのまま香川景樹と名乗った。書は直線的で、独特である。



香川景樹書「短冊」個人蔵

松間鶯

鶯の声にひかれて 小まつゑ ねの日もまたず われ来にけり 景樹

市川米庵 安永8年（1779）～安政5年（1858）

書家、漢詩人、江戸唐様派の大家、幕末の三筆の一人。

名は三亥、字は孔陽、号は米庵など多数、通称は小左衛門。

江戸日本橋桶町に生まれた。市河寛斎の長男。寛斎は著名な儒者で、

昌平黌の学頭（今の東大総長）、祖父蘭台は江戸中期の著名な書家、

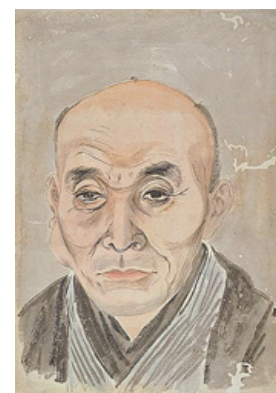
何不自由のない、大変豊かな家庭で育ったサラブレッドであった。

書は、長崎で、胡兆新に学んだ。その後、米芾や顔真卿に私淑。米芾にあやかって米庵と号した。

寛政11年（1799）20歳のとき、書塾小山林堂を開設。その後、大名など上流階級を中心に流行、

門弟5千人と伝えられるまでに発展した。また、文化8年に富山藩に、文政4年に加賀藩前田家に仕えた。

著書に『米庵墨談』『五体墨場必携』『米庵藏筆譜』などがある。隷書・楷書を得意とした。



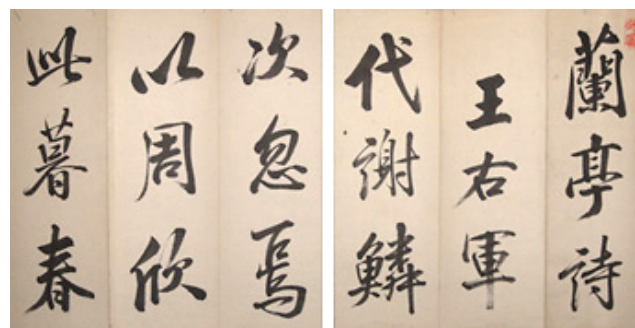
渡辺華山筆「市河米庵像画稿」



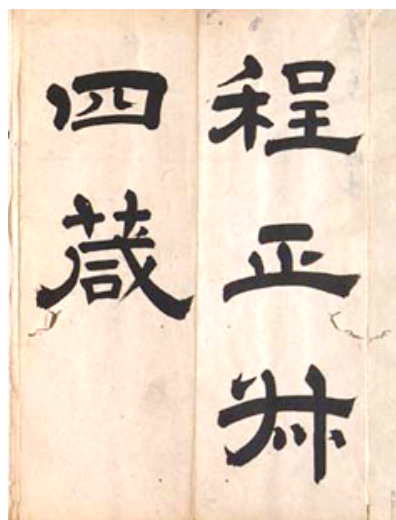
市河米庵書「折手本楷書」部分 東京国立博物館蔵



市河米庵書「折手本行書」部分 東京国立博物館蔵



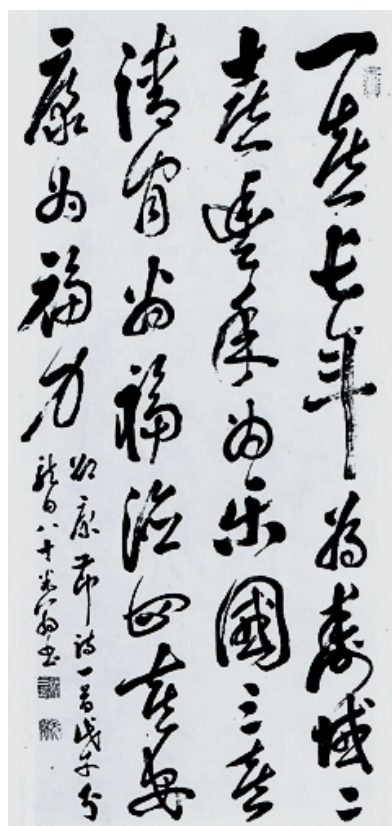
市河米庵書「折手本蘭亭詩並後序」部分 1849年 東京国立博物館蔵



市河米庵書「折手程正叔四箴」1810年

（隷書）
程正叔
四箴

※程正叔は、北宋の儒者。



市河米庵書「邵康節四喜」 80歳頃

（草書）

一喜長年爲壽域 二

喜豐年爲樂園 三喜

清閒爲福德 四喜安

康爲福力

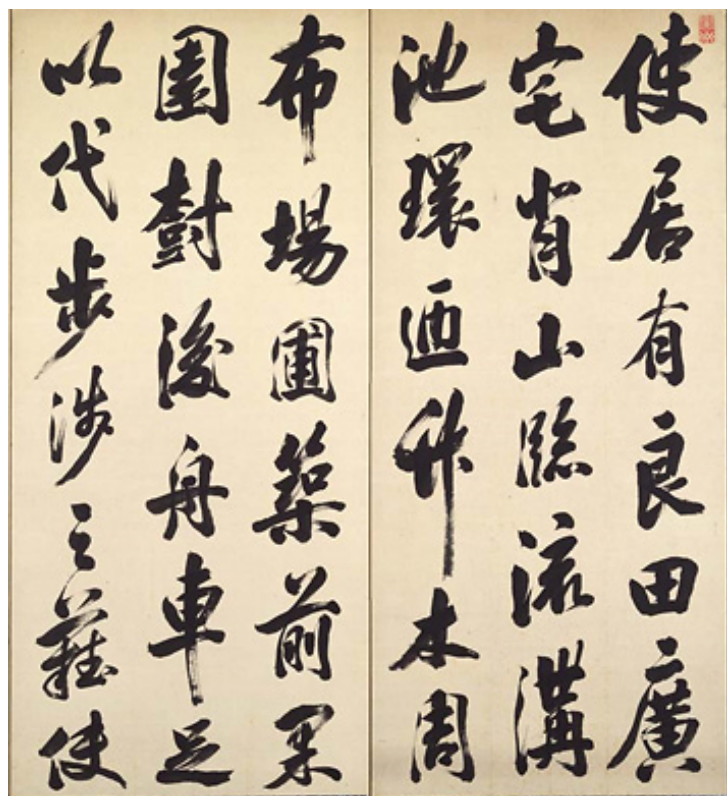
邵康節詩一首 戊子分

龍日 八十米翁書

※邵康節は、北宋の儒者



市河米庵書・扇面「三間兩間の○屋 五里十里の松声 対する如し山中の景色 何時も共に我同行す」 横最大 47.5 cm



市河米庵書「樂志論屏風」冒頭部分 各扇 134.2×60 cm 東京国立博物館蔵
後漢の仲長統（181～220）の『樂志論』を書いている。

「樂志」とは心を樂しますという意味。これには、文人の理想が述べられている。早くも、3世紀初めに、個人の自由や、個人の尊重を述べている。池大雅や巻菱湖らにも樂志論による作品があり、中国の陶淵明や文徵明・祝允明や、日本の文人たちに大きな影響を与えた文である。

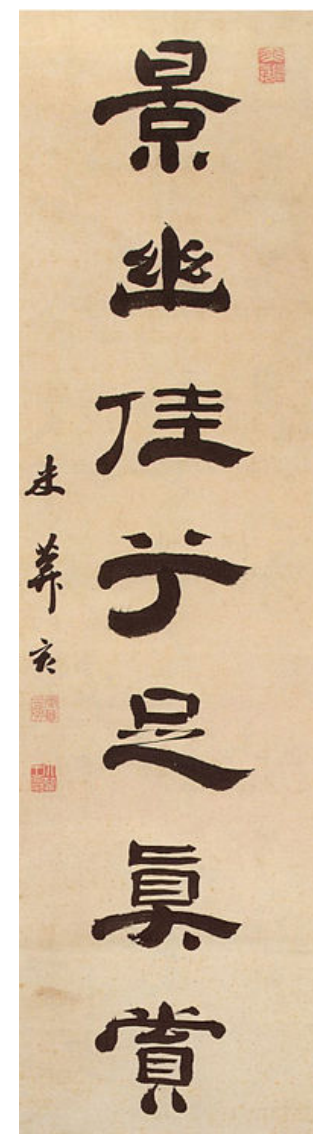
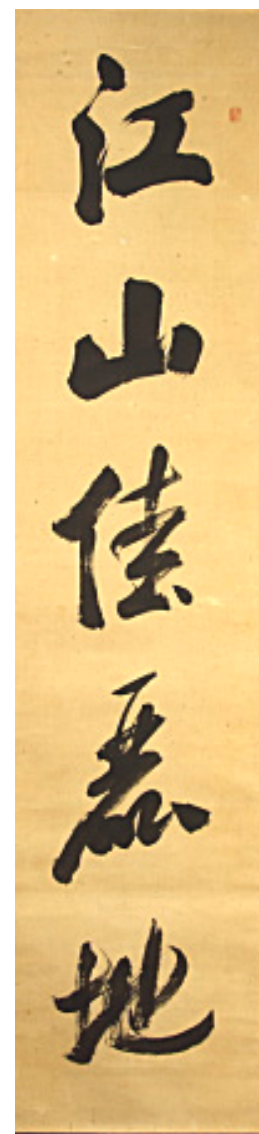
「居をして良田廣宅有らしむ。背を山にして流に臨む。溝池環匝し、竹木周布す。場圃前に築き、果園後に樹う。舟車は以て歩渉の難に代ふるに足り、（使令は以て四體の役に息ふに足れり。）」



市河米庵書 一行書
讀書懷古今（書を読み古今をおもう）
出典；清の閑庵



市河米庵書「双幅」紙本 各 125×30 cm 周南市図書館蔵
江山佳麗地 人物太平時 落款は米庵亥



市河米庵書 隸書軸
景幽佳兮足真賞
落款は米庵亥

ぬきなすうおう
貫名松翁

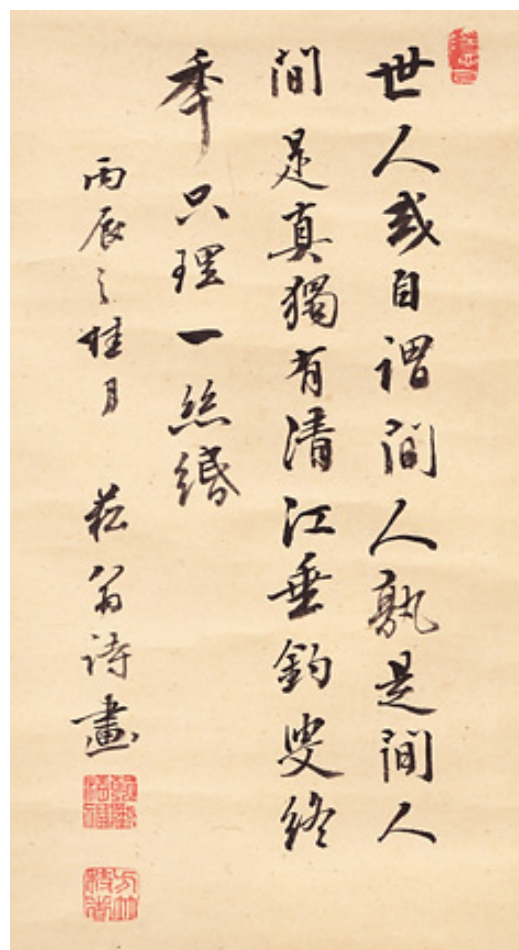
安永7年（1778）〜文久3年（1863）儒者、書家、画家、幕末の三筆の一人

姓は吉井、後に貫名に。名は苞など、字は君茂など、通称は政三郎など、号は海屋・菰翁など、別号に須静堂。徳島城下に生まれた。徳島藩士で小笠原流礼式家の吉井直好の二男、母は藩の御用絵師の娘。幼少から儒学を学んだ。文化8年頃、京都で私塾須静堂を開設し朱子学を中心に教え、学問で生計を立てた。晩年聖護院に移住し、聖護院名産野菜菰にちなんで菰翁と号した。最晩年は下賀茂に隠居。「江戸の米庵、上方の海屋」と称された。書は、はじめ米芾・空海を学んだが、後、晋唐風を重んじ、二王の伝統を学ぶことに励んだ。楷書は唐の四大家、行書は王羲之・褚遂良、草書は孫過庭を手本とした。85歳の時、中風で倒れた。その頃の書画作品は「中風様」と呼ばれ、傑作とされている。

画は、母方の祖父に狩野派の画法を学んだ。後、明の銭穀の山水図をみて、文人画に目覚めた。京都で文人画家たちと交流、画法を修得したという。老年になってから祖門鉄翁から南画を学んだ。門弟には文人画家が多い。門人に松田雪柯、円山大迂らがいる。



菰翁「自画賛・秋江獨釣図」
安政3年（1856）菰翁78歳
紙本 131.4×30.5 cm



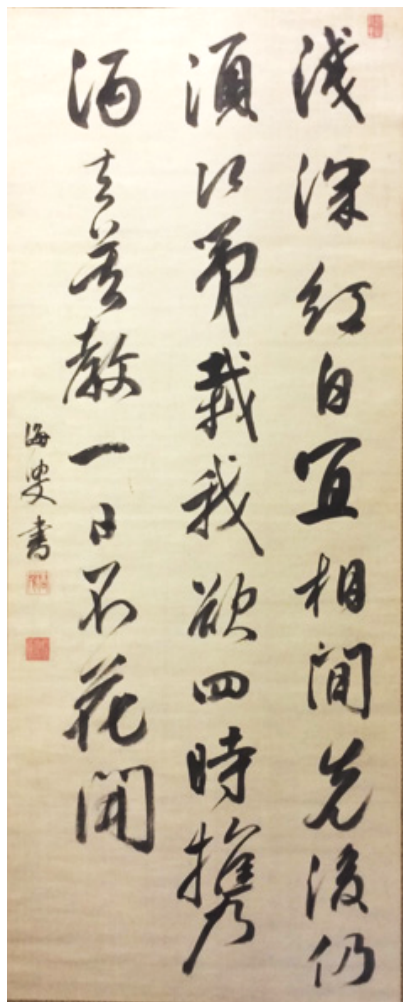
「世人或自謂間人孰是間人
間是真獨、有清江垂釣叟終
年只理一絲縷」
丙辰之桂月 菰翁詩画

（書き下し文）
世人或ひは自ら間人と謂ふ
孰か是れ間人たらん
間とは是れ真獨なり
清江に垂釣の叟有り
終年只だ一絲縷を理だす

（口語訳）

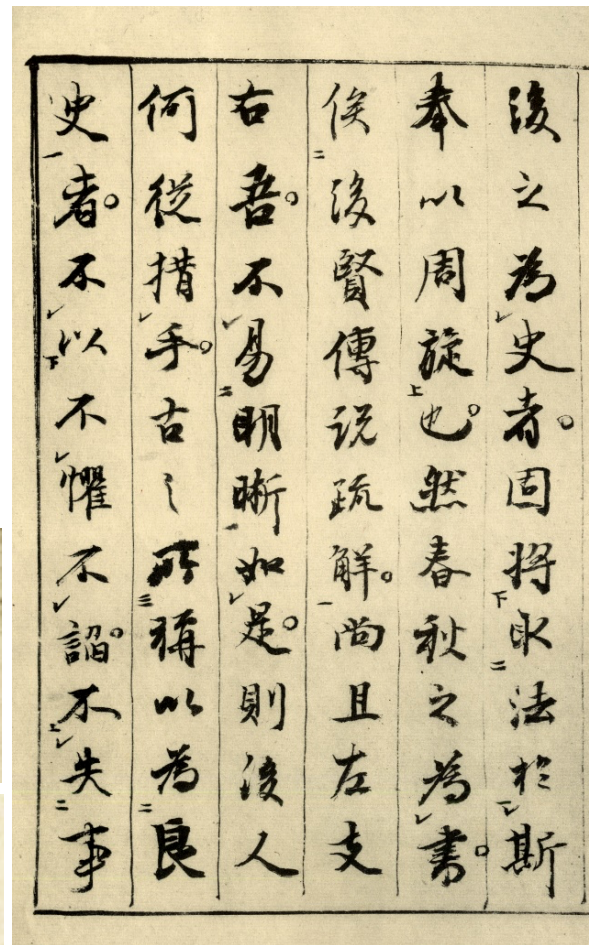
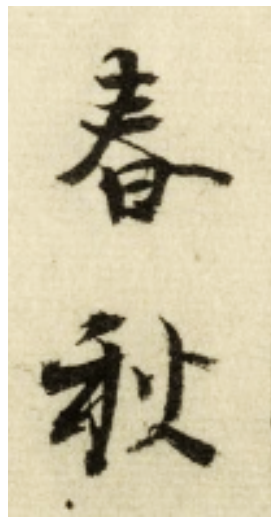
「世間の人に自分で閑人と
謂うひとがいる、いったい
誰が閑人というのか。
間とは真独ということだ。
清らかで静かな江に釣り糸
を垂れる老人がいる。
年中、ただ一本の釣り糸
を真っ直ぐに垂れているだ
けである」





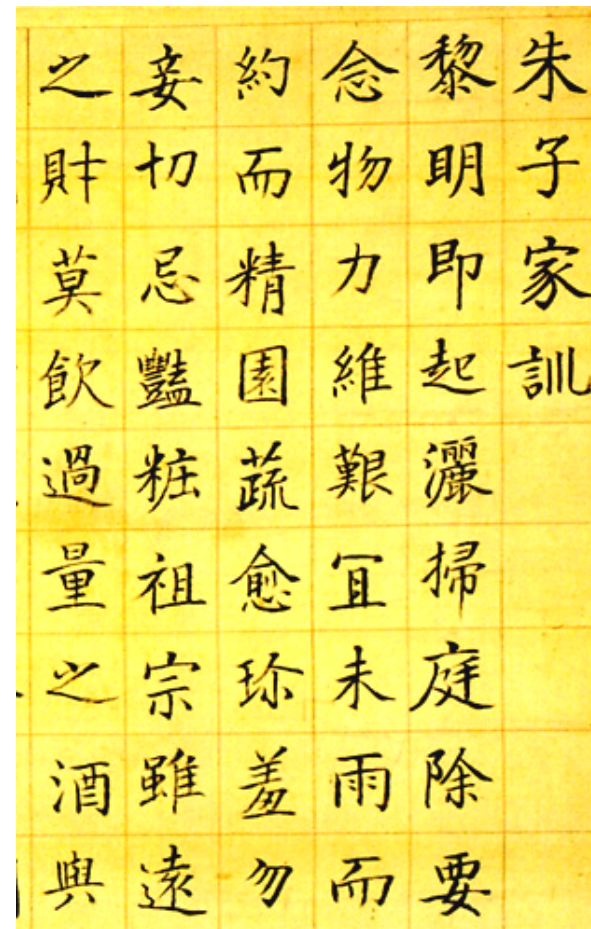
貫名菴翁書「歐陽脩・七言絶句」行草書 絹本

浅深紅白宜相間
先後仍須次第裁
我欲四時攜酒去
莫教一日不花開
海叟書
(歐陽修《謝判官
幽谷種花》)



貫名菴翁書「翻刻左繡叙」部分 77歳 1.2 cm角の細字の行書

左繡は、春秋左氏
伝の注解書。
この「左繡叙」は、
江戸で出版された
「左繡」のための序
文である。
だいたい、順筆で
始筆し、中鋒で書か
れている。側筆では
ない。

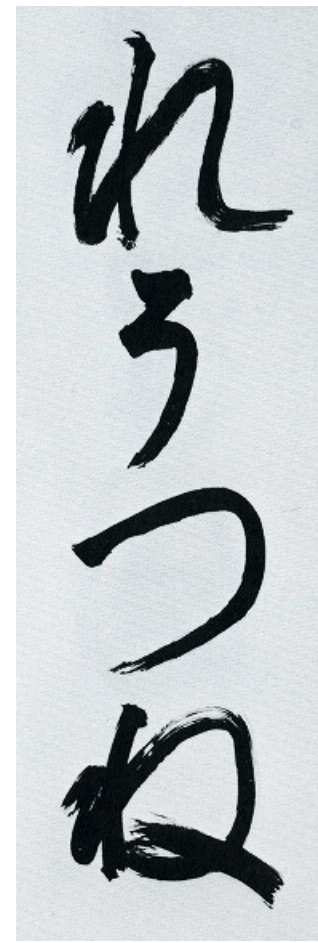


貫名菴翁書「朱子家訓」部分 細楷 絹本
嘉永6年(1853) 76歳 鳩居堂藏

清代の朱用純の
『治家格言』を書い
たもの。これは、
『朱子家訓』とも呼
ばれ、子どものため
の、儒教文化と漢字
教育の啓蒙教材であ
る。
晋唐書法による楷
書体。約3センチ角
のマス目に書かれて
いる。



東京国立博物館蔵



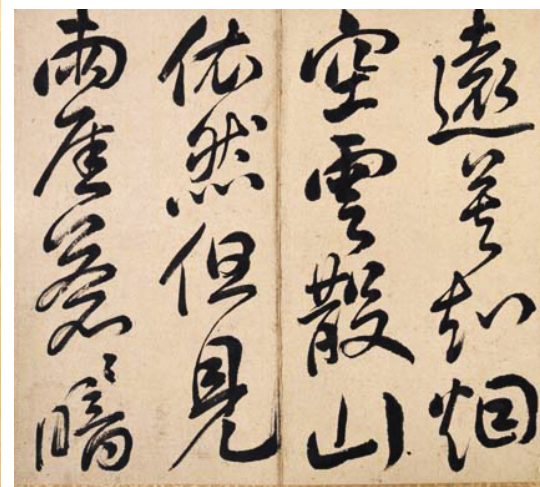
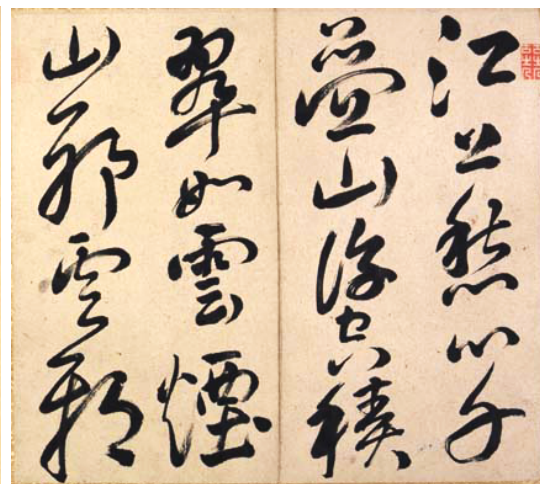
貫名菰翁書「いろは屏風」部分

貫名菰翁は、明治時代になって、日下部鳴鶴によって再発見され注目された。鳴鶴は菰翁を「人品高尚、博学多識」と絶賛し、私淑した。

菰翁は、晋唐の法帖と日本の三筆、三蹟の肉筆を並行して研究する学書の方法を提唱した。理想の書が晋唐にあつて、学書とはその理想を目指すというこころしい。

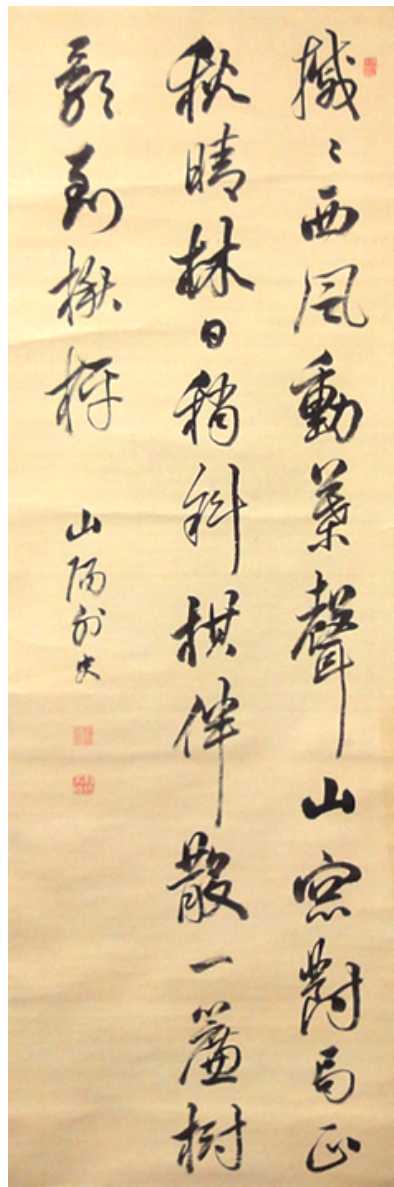
頼山陽 らいさんよう 安永9年（1780）～天保3年（1832）思想家、歴史家、漢詩人、文人。

朱子学者頼春水の子として大阪で生まれた。名は襄、字は子成、号は山陽、三十六峯外史。広島や江戸で学び、文化8年（1811）32歳のとき、広島から上洛、私塾を開いて生計を立てた。書斎の「山紫水明処」が上京区にある。日本各地を歩き、文人墨客と交際した。『日本外史』などを著し、明治維新の尊王攘夷運動に大きな影響を与えた。『日本外史』は文政9年（1826）に完成し、松平定信に献上された。山陽の周りには多くの文人たちが集まった。頼三樹三郎は三男。



頼山陽書「蘇詩帖」文政11年（1828）
各 32.4×18.2 cm 東京国立博物館蔵
唐様の書。蘇軾の詩を書いている。

「江上愁心千疊山 浮空積翠如雲煙
山耶雲耶遠莫知 烟空雲散山依然
但見兩崖蒼蒼暗・・・」



頼山陽書「七絶」絹本 32.1×124.5 cm 個人蔵

撼々西風動葉聲 山窓對局正秋晴 林日梢科棋伴散 一簾樹歌到楸枰